

会報

安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

CONTENTS

- 1 ご挨拶……………会長 金井 恂
志賀島—福岡市東区との交流……………丸山 祐之
2 志賀島への旅……………松尾 園子
シンポジウムに参加して思うこと……………池上 勝三
3 第三回志賀島歴史シンポジウムに参加して……………伊東 輝夫
安曇族こぼれ話 太郎と比羅夫は、同一人物か……………副会長 細川 修
4 安曇誕生の系譜を探る会が目指すもの……………会長 金井 恂
編集後記・事務局日より

発行：安曇誕生の系譜を探る会 〒399-8101 長野県安曇野市三郷明盛1078-1 Tel.0263-77-2803 発行責任者：金井恂



撮影：小松宏彰

ご挨拶

安曇誕生の系譜を探る会 会長
金井 恂

新年あけましておめでとうございます。皆様方にはよき新年を迎えられたことと思ってお慶び申し上げます。

安曇誕生の系譜を探る会は、卑弥呼の時代よりも古くから続いている安曇の悠久の歴史ロマンを発掘しようと、勉強会をはじめました。時の経つのは早いもので、それから早くも2年経過し、3年目に入りました。そして本日、会報「安曇人」を発刊することとなりました。このように会は順調に発展してきております。これはなによりもまず、会員の皆様方のご賛同とご協力の賜物と感謝しております。

勉強会では安曇の古代史および安曇族の歴史を論じる上で必要な共通認識として、また日本全国の古代史および日本史の中での安曇族の歴史を論じる上で必要な共通認識として、日本全体の古代

史の流れと安曇平の弥生・古墳時代の状況を勉強しました。そして安曇の古代遺跡の現地見学会を地域別に逐次開催しております。さらに昨年からは会員の意見発表と討論会を始めております。

昨年11月に安曇族との関わりを求めて、会の有志11名が福岡市志賀島歴史シンポジウムに参加しました。そこで安曇族ゆかりの地交流会として「あずみ・しか全国ネットワーク」を旗上げしました。安曇族とゆかりのある地域は全国に多数あります。その地の人々と歴史をはじめとして伝統文化・工芸、産物、観光等を含めた地域交流に広げることを目指したものです。

私たちは安曇の歴史を軸として外部との交流を行い、それを地域ぐるみの交流の輪に広げようと考えています。今後とも皆様の積極的なご参加とご活躍をお願いいたします。

しかのしま

志賀島 — 福岡市東区との交流 丸山 祐之

志賀島のある福岡市東区との交流は旧穂高町の時代に“安(阿)曇族”をきっかけに平成元年、福岡市政100周年を記念して始まりました。平成3年に入り青少年の相互訪問事業をスタートさせ、平成6年11月3日に旧穂高町合併40周年を記念して友好交流推進協定を締結しました。正式な交流は小中学生が隔年で相互に訪問しております。

安曇野市となってからは、合併協定に基づき交流しています。福岡市との正式な友好都市提携の話もありましたが、

現在福岡市の方針で市としては締結しないとのこと。ただし、福岡市東区としては安曇野市と東区で再締結し、交流を続けてゆきたい意向のようです。

しかしながら両市とも行財政改革推進を踏まえ事業の見直しは共通の課題とのこと。今後は行政主導から民間主体への交流へ展開したい旨のようです。このような背景の下、我々の会が東区との交流の中核となる可能性が大いにあるということだと思います。(企画運営委員)

志賀島への旅 松尾 園子

今回の旅行で私達はC班として行動しました。初めての班としての行動は福岡空港からのタクシーの分乗でした。4人ずつ乗る為、荷物は全部トランクに入れました。

タクシーに乗り込みドアが閉まり、動き始めて運転手さんに「どちらへ？」と聞かれて「博物館まで...」。すると運転手さんが「どちらの？」と聞いてきたんです。私は当然と思い「福岡の...」と言いました。すると他のメンバーが「博多じゃないの？」と言うんです。どうしようと思いました。空港で渡された資料は全部トランクの中です。金井さんがスケジュールを話された時のことを精一杯思い出して「空港から15分位で行ける博物館です」。これで決まりと思いましたが、運転手さんが言うんです。「どちらも15分位で行けますね。まあ前の車の方角で行きましょう」。15分後無事他の班と同じ福岡市博物館に着きました。市の職員さんが待っていてくださり、案内をしていただきました。立派な建物で多くの展示物の中をまずはまっしぐらに二階に向かいました。私的には今回の旅行で一番メインの『漢の倭の奴の国王の印』がある所です。そして、それは二階の奥の方にひっそりとたいして嚴重とも思えないガラスケースの中にありました。昔教科書の写真で見て、イメ

ージしていた物よりずっと小さくて、ひょっとしたら、これってレプリカか？、本物はどこかの国立博物館とかにあるの？、とも思える感じでした。契約書などに朱肉で印を押したのではなく、大事な書類を入れた箱などを泥で封をして、そこに印を使ったことを聞きました。たくさんの収蔵品があり、予定の時間ではゆっくり見られなかったのが残念でした。もう一度福岡に行く機会があったらまた行きたい博物館です。

一階の一角にお土産を売っているコーナーがありました。そこで思ったのは福岡の遺跡の多さ、資料の豊富な事。そして地域の歴史の研究グループの多さです。歴史研究会の発行している本が何冊も並べられ、それぞれが何巻も出されていました。多くの研究会の人達が資料を基に古代の歴史に夢を馳せたり、創造したり、議論したりした結果が綴られていました。装丁も立派なものから、いかにも手作りといった本までいろいろあり、層の厚さを感じました。

今回の旅行のC班はどちらかと言うと自分が先に立つより誰かの後について行くほうが好きな人ばかり集まって、危なっかしい弥次喜多道中をしてきました。(会員)

シンポジウムに参加して思うこと 池上 勝三

人は何故、古代史に思いを馳せるのであろう。それは己の根本の出自を知りたいから、それに気づいた時、人は歴史を学ぶ。日本の古代史の原点といわれる記紀には、志賀島の海人、阿(安)曇族の勇魂なる活躍が書かれている。彼らは日本人のルーツでもあり、私たちのルーツであるのだが、日本の曙を飾る古代の様相は学問的にも未だベールにおおわれている。これは、今回のシンポジウムに全国から

参加した阿曇族につながる皆さんのルーツへの熱い想いを基にした「あずみ・しか」ゆかりの全国ネットワークの旗上げの一端です。

阿「安」曇、志賀ゆかりの地の人々が全国から集まり歴史ロマンを語り合い、交流を深めて情報交換をすることにより自分達のルーツがより深まり明らかになると思います。(企画運営委員)

第三回志賀島歴史シンポジウムに参加して.....伊東 輝夫

平成21年10月16日早朝、マイクロバスに乗って、安曇野を出発、羽田空港前で金井会長夫妻と合流し、11名は空路福岡市に向かいました。空港からタクシーに分乗し、福岡市博物館へ向かい、此処に陳列されている「国宝の金印」を見ました。翌10月17日、宿舎に隣接する志賀島小学校講堂で午前10時から島の婦人会員によって福岡市無形文化財「志賀島の盆踊り」小学校児童の島の祭囃子が披露され「第三回志賀島歴史シンポジウム」の幕は開けられました。

二松学舎大学名誉教授大谷光男先生による「金印に出会って55年」と題した基調講演が午前中に行われました。

午後の部は、一時から当会の金井会長、福岡市志賀島歴史研究会、石川県志賀町、滋賀県高島市、兵庫県太子町、山口県下関市等から、安曇族に関する調査研究をされている会の代表者がパネラーとなって、パネルディスカッションが進められました。会場内の皆さんから質問も多かったです。とても有意義な雰囲気でした。

私達は、会場内で持参したパンフレット、名産品等を紹介し、手渡しながら信州安曇野の善さを知っていただけるよう努めました。「穂高神社の遷宮祭に参加してきました。住み良さそうな土地ですね。」等、好意的な話しも聞かれ、うれしく思いました。シンポジウムは、午後3時30分に予定通り終わりましたが、司会者の手際よさは見事でした。

午後六時から「国民休暇村志賀島」に場所を移して、交流会が開かれ、会半ばの頃、志賀島歴史研究会からの提案が出されました。同じ思いを持つ者が全国ネットワークを構築し、互いに情報を交換し合って自分達のルーツを少しでも明らかにし、更に、各地の伝統文化や産業等の交流を広げようと呼び掛けがありました。もちろんその場に居た全員から賛意があってシンポジウムが今後も継続される事が決まったのです。国宝金印のなぞ、古代海人阿曇族の全国進出、先人達の足跡のなぞ、等々知りたいと思う気持ちを強く持たせてくれた機会でした。(企画運営委員)

安曇族こぼれ話 ①

太郎と比羅夫は、同一人物か.....細川 修

穂高神社に、物ぐさ太郎を祭った若宮大明神がある。信濃国新の郷の「^{あたらし}ずくなし」者の話だとお伽草紙では語りだしているが、この男の生きざまは信州人のスケールをはみだして、興味深い。もとより中世の伝説上の人物。なぜここに、^{ほこら}祠があるのかもはっきりはしない。

「このお宮は、古い。阿曇氏の本宮で、穂高神社が分家です...」。九州博多沖の志賀海神社。阿曇磯和宮司が、常々語っていたのを思い出すが、そんな海洋族の縁からでもあろうか。山国にあって、穂高神社は、「お船祭り」を伝えている。

祭りの起縁は、飛鳥時代の武将阿曇比羅夫にあるという。比羅夫は「白村江の戦い」(663)に170艘の軍船をひきいて参戦、錦江で戦死した「大將軍」。祭りのルーツは、その命日



穂高神社 阿曇比羅夫之像

にあわせた鎮魂の祈りなのだという。本殿北には、ブロンズ像も建てられている。一説には、物ぐさ太郎の本名が阿曇比羅夫だともいう。だが、太郎は物語の主人公。比羅夫は実在の人物とされていて、活動時期も遠く離れる。まさか同一人ではなからうが、異なった生活形態を表わしながらも、ふるさとを背負って生きる二人の「英雄」の心には、共通した次元も思わせられる。

ともに古い時代の国造りで、人々の中に鬱積されていた思いを形象化したものともいえそうだ。「安曇族のロマン」と、われわれは面白がっているが、その底にはどれほどのふるさとづくりへの困苦が横たわっていたかを類推すべきなのかもしれない。(副会長)

わさび生産・販売



南穂高農産加工株式会社

〒399-8201 安曇野市豊科南穂高5148-3
TEL 0263-72-2240 FAX 0263-73-4832

入会のおすすめ(会員募集中)

入会無料・年会費1,000円

安曇誕生の系譜を探る会

お申し込み・お問い合わせ

事務局: 安曇野市三郷明盛1078-1 TEL0263-77-2803(金井)

安曇誕生の系譜を探る会が目指すもの

安曇誕生の系譜を探る会 会長 金井 恂

私たちはいま、安曇野の恵まれた自然と豊かな田園環境の中で暮らしているが、安曇野は昔からこうだったのではない。いまから二千年前頃に、稲作栽培技術を持った弥生人たちが進出してきて、その後いくたびもの洪水被害やさまざまな苦難に遭いながら開拓を続け、発展させたのである。そしてやがて安曇平は安曇郡となった。

安曇郡の「安曇」とは「安曇氏族」の名前をもって名付けられたのであるが、安曇郡は何時の時代に建郡されたのか？そのとき安曇氏族はどのように関わったのか？ということはいまのままである。

これまでの研究発表を考察すると、つぎのような仮説をたてることができる。安曇族は弥生時代中期、西暦元年頃に旧三郷村黒沢川右岸遺跡周辺へ進出してきた。当時は、弥生人たちが名古屋・豊橋方面から信濃国へ進出していた時代であり、安曇族もその流れの中にいた。つまり伊那谷から松本平を経由して安曇平へ入った。そして黒沢川右岸遺跡地域に居住し、周辺の縄文人たちと融合しながら、さらに安曇平を穂高、池田方面へ進出していった。やがて安曇郡の高家郷・矢原郷・前科郷地域に定着し勢力を拡大し、安曇郡建郡の主体となったというものである。これをたたき台として勉強会を進める。

本会は市民サークルであり、門前の小僧や素人の集まりとし、多くの学者・研究者たちの話をよく聞くことにするが、その説にとらわれない。テーマは自分たちの祖先のルーツを探るということであり、学問上の課題というよりも安曇野市民にとっての課題である。

自分でも考え、そして自分からも発言し、みんなワイワイガヤガヤ活発に論議する。そして自由で斬新な切り口から新たな仮説を構築することを目指す。ただし、日本列島の古代史の流れに沿うものであること、安曇平の考古学的資料と合致するものであることを基本とする。

弥生時代はじめに中国大陸から渡来してきて、北九州地域に定着した人々がいた。これが水稲栽培に基づく弥生時代の幕開けである。安曇族はその中の有力な一族である。記紀によると、安曇氏族は綿津見命そしてその子の穂高見命を祖神としていること、古代史の中でさまざまに活躍した没落していることなどが記述されている。安曇族は海辺で生活する海人族といわれる。その海人族が、海とは無縁の山国である信濃安曇郡へ進出してきたということは不思議というか、歴史ロマンに満ちた深い謎である。

安曇族ゆかりの地は全国各地に多数ある。そこは安曇族という共通の祖先のルーツを持っており、地域としてのつながりがあると言える。ゆかりの地交流会は、二千年以上前に全国に分散した一族の子孫たちが里帰りし再会することでもある。このように考えると、交流会では歴史に拘らずに地域の伝統文化・工芸、産物、観光などを含めた地域ぐるみの交流に広げることが望ましいのである。

来年秋には安曇野市において、他の多くの市民サークルにも参加していただき、地域ぐるみで安曇族ゆかりの地交流会を開催したい。

編集後記

待望の会報第一号をお届けすることが出来ました。やや堅い内容かと思いますが次号からは皆さんのご意見、研究等をいただき、読みごたえのあるものにしていきたいと思っています。会報名「安曇人」は会の名称の「安曇」が意味する安曇野、安曇氏、先住の人々、今の私達すべてを含んでいるのではと思っています。私達のルーツを探る道は遠大かつ壮大であり、はるかな旅でもあります。『日本語は天才である』という書があります。日本語もそうですが日本人も天才だと思います。日本の古代については幾多の研究書がありますがその入口は神話であり、それを見ると日本人は天才だと思わずにはいられません。しかし私達はあの壮大な物語から歴史の真実をかぎ取らなければなりません。歴史学会の現状は混沌としているように思われます。最近新しい考え方も提唱されていますが、とくに角私達は先人達の研究の中から何を見つけたかが課題だと思います。研究の先達の方々のご指導をいただきながら私達の視点で探る道を進みたいと思っています。この会報が会員皆様のご意見の交換の場としての一端を担っていければと願っています。皆さんの積極的なご参加をお願いいたします。

(編集委員長:本郷敏行)

事務局だより

- ◆平成22年度は、安曇野市補助金「つながりひろがる地域事業」が2年限定のため対象となりません。そこで県の「地域発元気づくり支援金」の申請をしています。支援金がもらえるように頑張っていきます。
- ◆会報が発行になりました。会員の皆さんの意見交流の場、安曇野市民への宣伝に役立てていきます。皆さんの寄稿をお願いします。
- ◆本会の運営資金「年会費」未納の方は事務局まで納入をお願いします。
- ◆企画運営委員会、会報編集委員会、交流推進チームが組織されています。「あづみ・しかネット」の全国交流活動が予定されています。たくさん企画が考えられるので、積極的に参加し 強力な会になるようご協力下さい。
- ◆第4回総会を4月に考えています。ご意見等ありましたら事務局までご連絡ください。



安曇誕生の系譜を探る会

会報発行:平成22年2月20日

事務局長 金井 恂

〒399-8101 長野県安曇野市三郷明盛1078-1 Tel.0263-77-2803

URL: www.azumitanjoh.or.jp E-mail: toorukanaia@ab.wakwak.com



安曇之祖神 穂高神社

安曇野市穂高6079 電話 0263-82-2003 <http://www.hotakajinja.com>



穂高人形飾物と道祖神展
資料館 御船会館

電話 0263-82-7310